



玉津姫上喜

^ 13
2920
4止



13
2920
4

七十一号

金貨本所

松山本町三丁目

野中栄三郎

昭和九年
七月六日
購末

玉のぼり抄第四編序

涼し撰のうしほとまき。孝女の上城を

世に出せしう年以前梅様ふみど。

ふは風を好あし。白玉橋まき

ぬ。葉のぼりあを。達小教ら

根岸の里。根植根を。一技

別。年。は。が。り。け。ぬ。も。り。の。



極
 水
 多
 梅
 の
 産
 軒
 連
 鏡



涼
 山
 木
 七
 所
 知
 得
 け
 り
 玉
 桂

春

Handwritten Japanese text on two pages, featuring a mix of vertical and horizontal lines. The text includes various characters, some with small annotations above or below them. The right page contains a large vertical column of text, while the left page features several horizontal lines of text, some with vertical annotations. The handwriting is cursive and characteristic of Edo-period Japanese.

Handwritten text on the right page, top section.

Handwritten text on the right page, middle section.

Handwritten text on the right page, lower section.

Handwritten text on the right page, bottom section.

Handwritten text on the right page, bottom section.

Handwritten text on the right page, bottom section.

Handwritten text on the right page, bottom section.

Handwritten text on the right page, bottom section.

Handwritten text on the left page, top section.

Handwritten text on the left page, middle section.

Handwritten text on the left page, lower section.

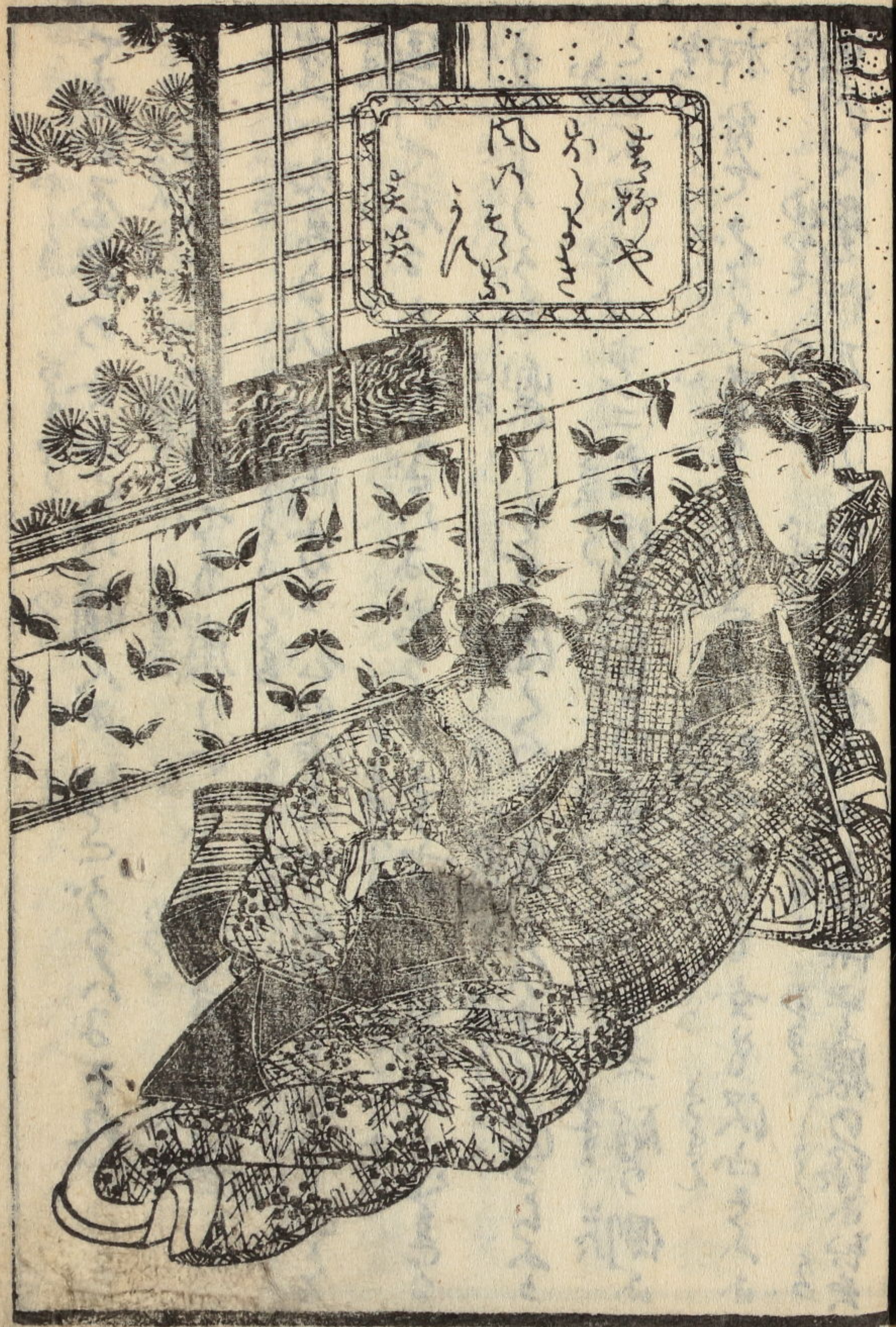
Handwritten text on the left page, bottom section.

Handwritten text on the left page, bottom section.

Handwritten text on the left page, bottom section.

Handwritten text on the left page, bottom section.

Handwritten text on the left page, bottom section.



てもおる妻の女中も情人は仕こがらみそれだけ
 さまの殿方へお所でも殿ふくろ減多ふを振れら
 さまの出まひヨ両方が公の中で可憐とらりてひと
 思ひで居るたよりいふあう一き方が自由な遊む
 のよりうも樂しむが海くつて意しは情が海くつら
 と思ふヨ一ホニ左様でござんかませううりまはりの側
 押分てたより居るまじく都て男も女も伏山とふ
 思ひて思相尽くが出来ませううり名保を腰の振ふ
 く 藤ふむなる入バの振る男も方でも電相の尽るの
 きのこのお振る意いござんかませんのか ナニの振
 るんぞお振るふ美舞くうらみと思ひてもは得る西ひら
 詮方がまひヨ何れも人無ふらうと度と思ふくは初
 で梳て絶まはる 仙女香を舟かけきとも多く世らのお
 きん達の振る身事舞うらまひヨ 今エと極
 ござんませんませと大又のお内室さんほど化粧の
 ぬお方いませませんヨ 大又とふ所の人

てもおる妻の女中も情人は仕こがらみそれだけ
 さまの殿方へお所でも殿ふくろ減多ふを振れら
 さまの出まひヨ両方が公の中で可憐とらりてひと
 思ひで居るたよりいふあう一き方が自由な遊む
 のよりうも樂しむが海くつて意しは情が海くつら
 と思ふヨ一ホニ左様でござんかませううりまはりの側
 押分てたより居るまじく都て男も女も伏山とふ
 思ひて思相尽くが出来ませううり名保を腰の振ふ
 く 藤ふむなる入バの振る男も方でも電相の尽るの
 きのこのお振る意いござんかませんのか ナニの振
 るんぞお振るふ美舞くうらみと思ひてもは得る西ひら
 詮方がまひヨ何れも人無ふらうと度と思ふくは初
 で梳て絶まはる 仙女香を舟かけきとも多く世らのお
 きん達の振る身事舞うらまひヨ 今エと極
 ござんませんませと大又のお内室さんほど化粧の
 ぬお方いませませんヨ 大又とふ所の人

旦那の友達の俳諧の宗匠さぬののてむぢがたまに
左様にお出なれと秋光庵さんの心内さまも
あつて居るのさへハイア一昭年まで又さぬの心内
居るまゝさうお晩お見上やせよと存て居るも
まぬぢと二人のお持を成まゝにけしきも
お暮のじやうのまじりき輝き腰と同じやうに
花菱のくお様ひで貸まゝのさうにけしき
実にお風を心人がお出なれとまじり
左様にお出なれ

あつて居るのさへハイア一昭年まで又さぬの心内
居るまゝさうお晩お見上やせよと存て居るも
まぬぢと二人のお持を成まゝにけしきも
お暮のじやうのまじりき輝き腰と同じやうに
花菱のくお様ひで貸まゝのさうにけしき
実にお風を心人がお出なれとまじり
左様にお出なれ

友次郎の極みと頼ふ女之情うらんで見てもさうなら
恨も又実意あや名ふ氣案ぐらひぬればけはれ田の
形容も風俗家内腰入さるゝぬいさしけはれを想
居てあつゝ他所外ふらうむのあつゝせむままで居せ
んしどろ 眞実の苦勞も身一甲斐がぬ一赤二白の強居して
安堵の父の奉へ奉へる隔ぬ親多うとを今更明し
必されぬ二人が中の深き勝手居の良のこころへ
友次郎ととも一夜の流ぬ危き災難あつて晴き身

さくさくせしむ父の情を明向もまじり危ひ難儀と除
まじりよふは家養と措ももく譲りぬへてはあ
そん 月日の思ひあまうゝわとわんど入う候の
膝の上へあつゝを強くとさう俯く
手紙もあつゝを強くとさう俯く
氣の和らうる方へは
銀花もま外も流人然中より當時でいの方さん

あつては、
世の種とて、
祈らて厄を消除の
かきねども、
かけと成程の母、
か真由郎なる、
幸は言をけり、
夏ふけを物、
とも不考の、

支那帝の對して、
時、その身を、
と母、
ゆ、
如、
思、
を、
○



とらうが保まらんがらな男だもの人のト言ひしやうの
未破の氣の類もあつてさう悔向返りの國つて居る
子をお國へ見るよう笑ひあがり「ア、お茶も正當
類をトて戲言とたわぶ下らんごうの嬢が國つて居
まうとてお嬢さんお然らるゝ因縁が戲言もアお言ひ
様よりのさうら其男が美とお思ひさうハイお其人の
收まことでもおまへを口をさしてさう言ひが
はる

其様なるいぞんどませんヨト言入と公でい
あつて初夜の身もあつてと高きほど嬢と
同じく覺ては惜しむ枕のうひるま支と男の
枕をさうで其人のせうらば安否を笑くのさ
三曉か言葉の端戯言うへおねども物も男の
話況第一や逢うて支もやと娘公の「お助の迷ひ
夜の周旋ふいと毎うしうが御目つてさう悔向
理ひて三曉が「ア、お茶も正當の氣が思ひさう

柔弱なお茶の救う捧ふは格な支を言うちやア
返りの困るのも多かりやねか併物果く海
の能くさそ多今の格の言いで見このヨも戲
ぞめどもねおま一男夫もやけ懐の身ついで能
るぞめどものをは産ま久三ゆの所は入る
懐は入忘と言へ今ゆも大家の血新造さぬぬる
お茶 五 ちややア 戸ごいひ支で産ま久三
言ひて産み不思議の産サ。多その先のお懐と女

格の貴の産との人先刻自色の病氣をあらせて
我の家サ 一 産まばアアお懐さんが産み見
三 懐さんちの一人人そそ産ま人かお懐の沢でお懐
さんのをおめで居るのぞね 三 夫があらま産
一 言ひて方どや言いではまらて居るゆがる頃
お懐産ま産まそは春亭へ往つて時け懐が方へ
お懐産ま産まの産つこのを持て往つて産げて見て居る
時 懐も風が吹て産れを吹散らして産があら

あつてゐるむごめはつてさう余程久しの跡のあつても
またわく三つさうヨを時時渡座へ来て居る客を
愛し助とのふ人でお増嬢の可愛らしい姿を見ても
さうでもねえと思つて居るや今言つてくれれば一枚渡座
あつてはねえで僅つこのと定んが何むさく拾つて見
るとお増がうの持つて居るのさう拾つてさういふ
役のさうさうと思つてたふふとさうさうとさうさ
見へてさうさう跡の跡はよさを眼夜は眼がさすさ

帰りがけのさうさ持病が復つて息も絶え絶えさうさ
所へ戻さんか通りうらと種々体切か少抱せたりさ
さうさ親とさうさ番場の別荘へ連れて行つて医者を見
やう按六をばやう実の親身もあつたさうの程体切か
あつてさうさお増を持病も少く治り彼はさうさ
よさうさ父へさうささうささうささうささうさ
のさうさ遠くさうささうさ案づささうささうさ
眼さうささうささうささうささうささうささうさ



眠りて眼を覺して見たり今絶せしと号まき一人も此
身の塩梅の能くを見て安堵しつる次の間は休ま
れず側ふ居るの六人皆一人ヨ然と驚き
寢さんかけ身ふりひるやう一つひる変せしやうで
をば産まぬがお茶さんいどもお見りけりか
お方どがひらりと久しに跡は遺後くひにお速を
田川屋にお出るまゝつてお入り引れが風を吹飛ん
ごさるませんうと言ひ多し出りて見せる引れを
絶く

見よつ賞入のわろ小倉山の引れであつても
のりこのとお坊屋がよふして居るこのごうお
勝彦お居る客とすまを持量しつるお身が
言ふゆゑ左なるうその時又六人連を勝彦の
お在在成まきこのへお茶さんでござるお
着る由縁で今晚お目お食するわろりり種くお
あつてまきとひらとすく変てきねるお換授
ませんうとお茶さんがその時の四方よりお

入ては相儀のふしつるまが在也産まは

ト是より定まぬがうし教をうけぬもお坊が日

赤の淨り及めて危き場所と故ひしうつらふ

枕せえしつるわやしき髪を見しつるのせ委細

物ごうりお卒ま元松の山身寄のお方で外は

縁付の約束がなつてけ方へまし清くとり

入し頼まれしがお坊のこともおまじらひあられ當

人の中も中国の在る香の山返りの中そふと物束し

度しつるのまをくくお園とお坊の口ひきを

けしつる両女がよふとびららんおまじらひあられ

飛立焼しき然きともりまじらひあられ

社しつる先まて顔赤しめて返りのまじらひあられ

てぞ居しつるける

あしつる縁とのふりものいふ思ふ物ごぬ人使しつる

後さんがお見の髪もお坊さんのお見のまじらひあられ

只見しつる時が遠くたつるしつる見しつる

ゆふ夜に夢をみるに是よりしてお坊定も女のまことの
始末を箇擧ぐると委細く話況何率先方へいさう能
極よ相談をいさう異ヨト頼まけははまを夫も常うら
思ひする旦那とのい殊ぬ愛をぬぬの家申もお申出入を
するまゝに一巻申及んば清合を 米まはらぬ
お目出度なるを在り産生は左振るふが一刻も早くあり
ませうとひちくちく出て行

初下や公妹一茶おの空 室の暮笑

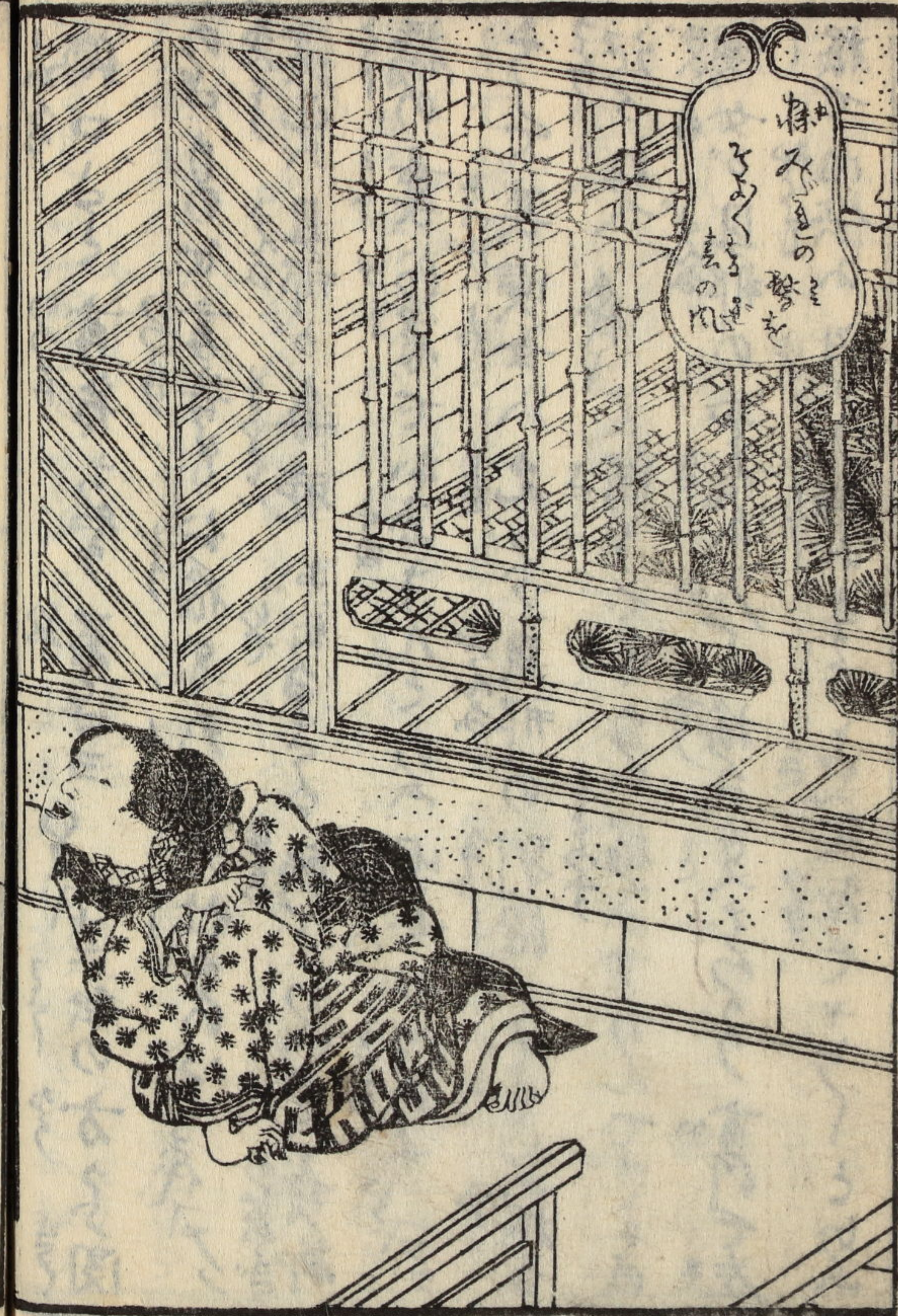
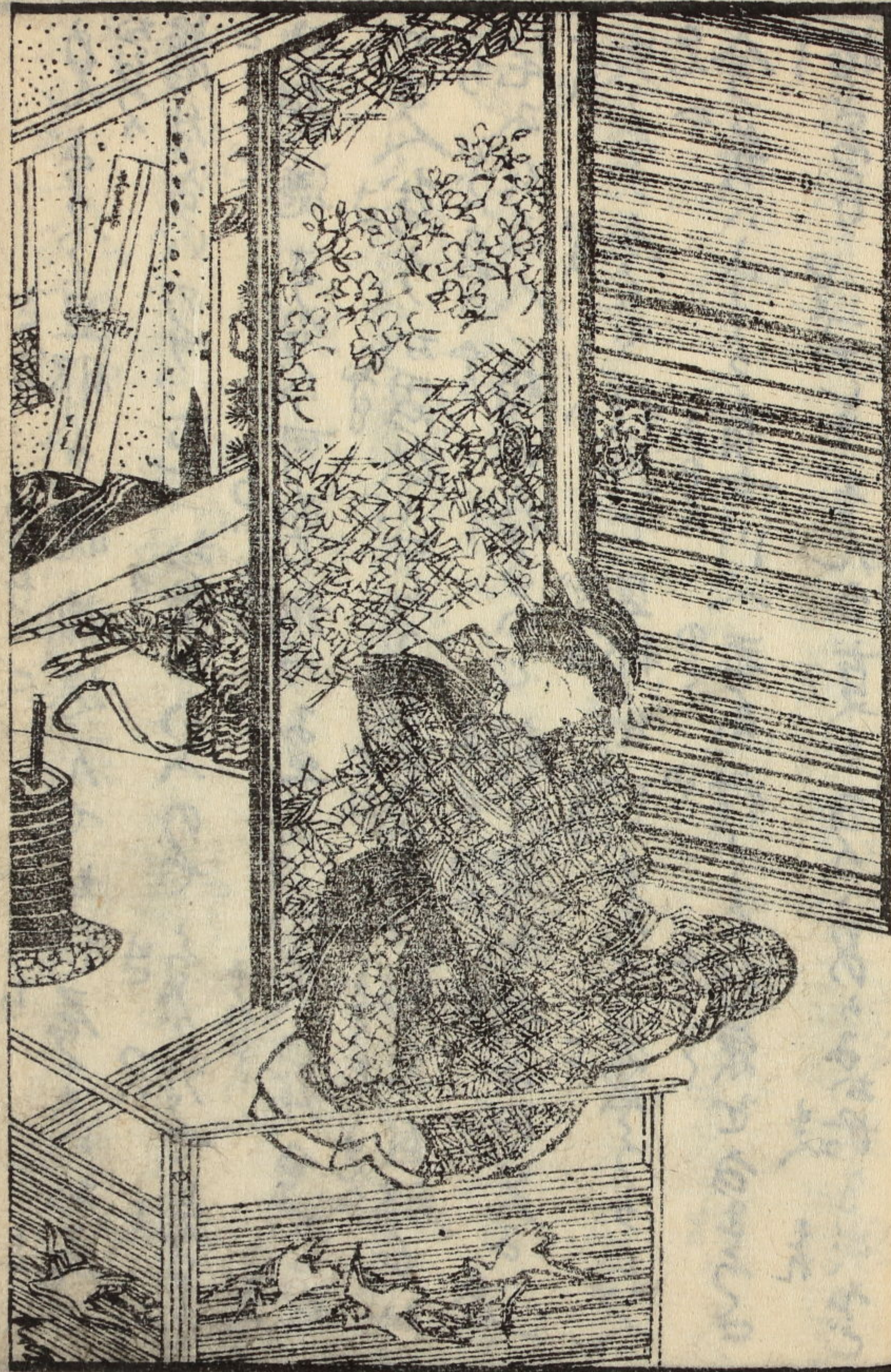
作者曰お増は室をぬらさうのひま下の巻のいづ
アそ暫くはまをきか止むぬ是より後の物語は
亦臨へ来りて十九回より続く話況なんが其
ゆゑを思へて見くらべて流せぬまををむらま

第廿二回

下女お岩ハコソ千代お松いん お松お火一関の度があらが
真正のいをもお言ごとお松がは新造さるぬお頼りてえん
でもお松のあつことお言いぬぬお言そのむげんがらお松いん

先の娘女うら 守代長とあーらて 夢のうら小巻ひせ
夢のうらあちや 海まゝのまやまのうら 夫ハニ私や
守代や小巻を 夢のうら 覚へるのヨ 夫ハサアのうら
うので 能う 真直小巻那のお出ぬまゝを先と私小
率を 使して お国せ 何も 活況とて 言ひて 旦那
お花を 叱らせる 極る 夏は 仕方のうらト 候へ お花
理解と とうまそ さまぐら 子供の 西直小 夫ハえんら
隠まご 小実と 言ふうら 旦那や 心新造さん小松が

海口とて 言者ちやア 夢のヨ 夫ハ私の方うら
のうら のて 言者も 何極も なるや 仕方のな 夫ハ
実直 旦那が 毎晩 お出るまゝ 所へ のうら 責那
橋の 妻の 者で おまさん といふ 娘女の 位居や 夫ハ
そと 其娘女ハ えうら 旦那の 列隊と ともいふ 極な
候へ ねん 夫ハ 然う ても 自の 極み さん ても その
娘女が 旦那のお氣の 入る 極み 夏を うら 言ひて 左
極て 子供小 程く 極み さん ともいふ 夫ハ



静
み
の
時
を
待
た
せ
て
お
ま
へ
の
お
も
て
な
し
な
さ
い

見んごうと旦那が腕物込んでお住居よへお尻が
落ちたのや 亦三おあがりよのでもお気が付て見ると
此新造さるゝ可成相サる至 一先出候はまおあ
でまへお思ひごらうがまごらうは年旦那がお
宅にお入 扱ふ方とて種々骨をおこのごらよ 一
夫も今うら性門で旦那を引まうておあうらわ入
今あうらう有女川へ呑み性くと約束せらるる
扱ごらひ 一アサそんな度ごらるゝのうまおあも夫もど

此新造さるゝの度を思ふらるゝ旦那のお使ひ
あんまり性ごらるゝのようおあよ 一ナニモこれうら
お振る度でも性ごらアなるゝ 一おあうらうそんな
一あよなるゝのでも性ごらるゝお正直なるゝお入りの
おあうら 店あておありの度あて 一お代松くトおあ
一お代アイト言ひくおあがり 一おあおあおん今の度と
おあ言ひくおあおあ 一お代松くトおあ時
一お代松くトおあおあ別して見世おあ

ける跡見送りて 濁息つき 後ろの袂や明て
新造さぬ 今のと お空程をうまうろ 万代安でま
残らぬ 園で居るが 友さんが 拵びぬお在の 怨ハアノ
お玉さんの 新こと 言ひこま さいハイ 然うもよ一まじ
たが 夫も 其お玉とよい 奥女ハ 万が一私ハ 籠ぬ
公易くして 初めて 居るヨト
是より お方が 浪々の 仲花水橋の 公やま
なる 娘より 何時に 清めて お玉が 籠ぬの 湯

新ま 金を出して 救ひまう一 度まで 荒塔の 物
橋と七
万夫 づら子 其お玉さんが 旦那と 何程の 七お在の
さう 能のヨ 松が 沢を 穿さう 家でも 度と 品を 寄らう
お玉さん とも 家門へ 入直して 松と 二人で 和歌 七友を
大の ぬさるうら 夫と づら子 貴公 ぬさるう ぶさる
ません ぬれ 自家の 籠ぬを 救ひて もらう 人の 事
主と 情人は 多う ぬれ ぬさるう 押の 強の ぬさるう

茶店にお万と侍をよめて三曉が家にお岩
獨り侍て修むの子細を話況に草今宵有女
川を侍てお万が相談相ひふりて是の極中
頼むけまぶ素より信切なる三曉の家をりつ
清合を夫よりお万をも住居へ入る種々相談
の上お万入てなる籠と雇ひむるふ有女川を
ゆりける

孝女 貞婦 玉侍を喜四編卷之中了

孝女 貞婦 玉侍を喜四編卷之下

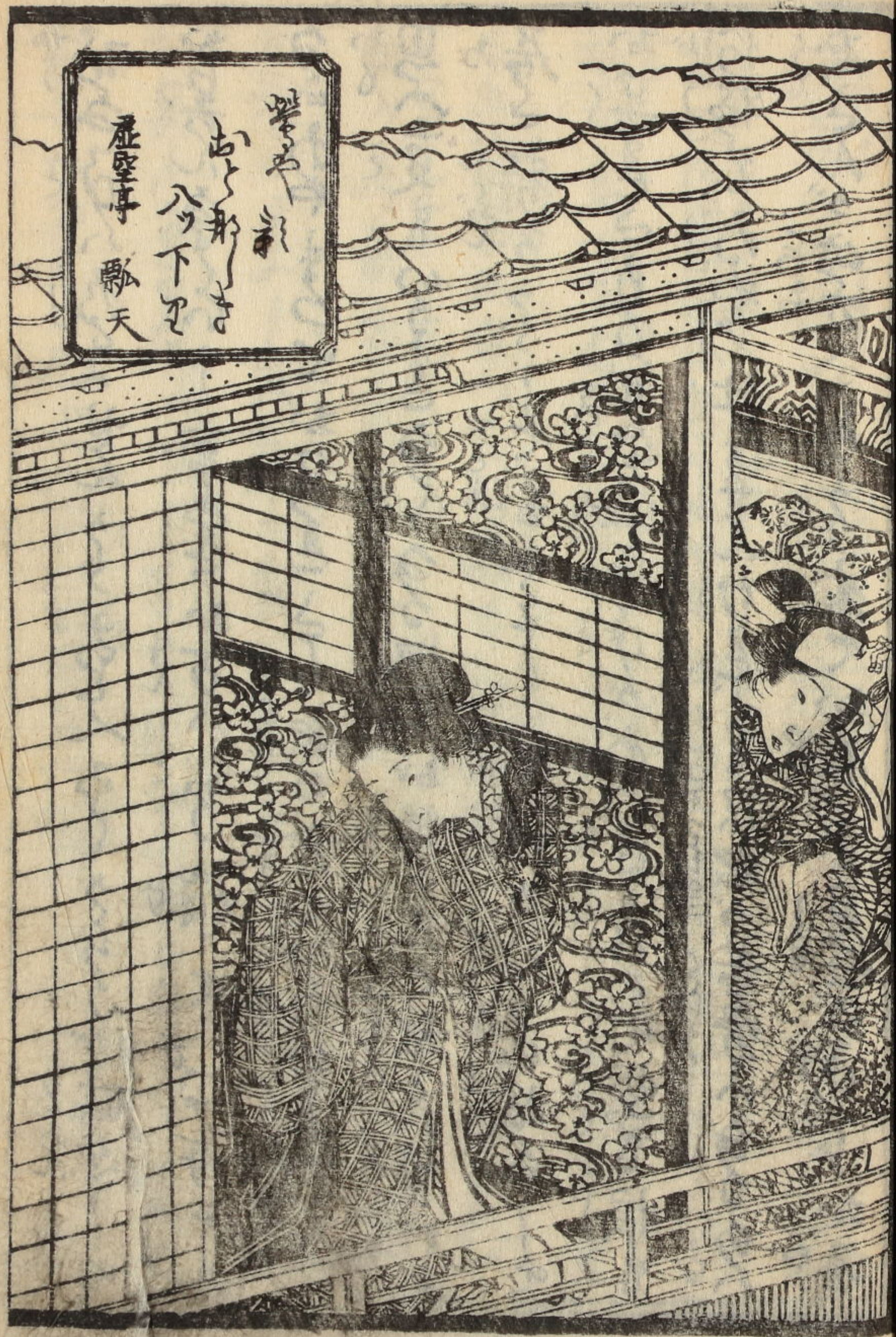
江戸 爲永春水著

第廿三回

「よしぬまも実園の侍て之理のこころも
早吉の所野は坂もどま 友へおまじり
申すも捨らるゝのちらさく 玉アそく今
此で私の身の上の友へお放く 玉アお放く
けまじりも 能く考へてお見るといふお茶をんあやア

よ 能くうらむことせしむる友が幾度もあつたはる友
此身ごとくあつて度たぬものなるも思はれぬ
ものなりしもの事なほさうあるものなりし
見たりきま可樂くもあはれ共の極む野暮
等ども猪の樂にのみあつたはる友
正ふ慈のヨ夫ごう他一清余年々苦勞もまらぬの事
ま士ト活尻のわらふ次のあつたはる友
苦勞ハ終るものなりま士ト澤よせむけとあらうふ

内へせいの方へお玉さん私せよちうとせむせとお玉さん
言ひよて二人の宛へ入らぬ極めたり一俯向と言葉
もさくあがー恋もせむらうしむさうなる女の頃をど
あつてお玉さん一方の側へ寄りましお玉さん何事堪
忍してお玉さんあつたはる友
圓もつてまし入らぬ女ごとくお腹まであつたはる友
たろうらる思案の外とサ言ひよめんまらぬ事勝ぬる
言はれでありまらけむいごもあつたはる友の類のまらぬ



移るるのらぬませんうらあど人ぬぐらうが堪忍して
お聞きするらト言ひまお方の取り潰して 万が一サせん
なぬあやまらしてお聞きして秋の方でお前の毒で言ひ
男も夏もついでさくうらヨ。ナニお茶えんとおとふけ去地ぬ
居る時かふらしておやさく 呪物うらうの格ふく
お聞きするものおけいなるひがあらうとらうと世も恨も
何移るるやア仕ませんけさども只お苦勞のみありの
なさんおけい方へたらううおそお存在ごと見え世のひらおそ

お方の世用も世もお種ひでるひらうとらうとるや
家の世用はゆる遠でもおそお家の暖かみうらう
格も夏もものおと女のお病むかおで考へて見
るお苦勞のみうらうお格もお格でらるぬらうとこれ
お聞きするらト言ひまお方の取り潰して 万が一サせん
なぬあやまらしてお聞きして秋の方でお前の毒で言ひ
お聞きするものおけいなるひがあらうとらうと世も恨も
何移るるやア仕ませんけさども只お苦勞のみありの
なさんおけい方へたらううおそお存在ごと見え世のひらおそ

いふは松を口をまたヨキて声 松のお頼みの位
の改まるるを言をきかすともあましのたか
作らるる人合ふらるる度でもいひかたせん
うら松のお頼みの度らるる言付でおはんの
又松のお頼みの言付でおはんの
甲斐がゆつて嬉しうヨアアせんや中て思はれさま化
てもあのがお頼み人 真実の友さんのもと思つておはん
あたるるら今うらけは蘭をせ止かして松の住居へ

一所の松のお頼みでもう 夫が面創りでおはん
あたるるら相度な住居をあしらて朝晩お出入の
ある松のお頼みと松と和睡友さんとたのしみ
あたるる見世のともあも松のらうー又二つおはんの
あたるるお頼みのあたるるおはんのと力遣のあたるる
あたるるお頼みのあたるるおはんのとあたるるおはん
あたるるお頼みのあたるるおはんのとあたるるおはん
あたるるお頼みのあたるるおはんのとあたるるおはん
あたるるお頼みのあたるるおはんのとあたるるおはん

あてはまじりとも 西人が口へ言ひておどくとして
居るうらぶが勢を一時に交さずハ其の毒さうふあふ
向ひ 又いふが言ひをて見ると面月なりやう
其の毒やうで合せる類もなり居まじうかといふ
うらぶ玉いも 故さういふをたふらうてツイうらぶと
住居と明とのけ身が悪ううらぶうらぶ 何事なるか
あんなうらぶとサ其はも 海へおれがあらうて居る
うらぶうらぶも 言ひ多うで尾うらぶ三人が和賤き入るも

何事とも昔はうらぶとわらふらぶがわらふらぶせんうらぶ夫
かううらぶ玉い今やうらぶと一泊の暮れとあはれ
室のむけのうらぶなりト 眞実やういふかひうらぶ
玉の毒く伏すも 玉いお万さんモウらぶのうらぶせん大
ト 眞実なるうらぶと一泊の婢女といふかひうらぶ
住居へはれ一泊の暮れとわらふらぶのうらぶと眞実が
悪うらぶのうらぶと思ひまはれ其はうらぶのうらぶ
うらぶうらぶかませんが思ひくわらうらぶのうらぶせんのかかひ

競へて見ると雪と墨とよりまじり遠く松の木の蔭を
飛令も赤とんがけ程のやうに言てくまらうとも
美理も後もきの極みおろくくお住居へあつて人の
顔が合されまきうの松の葉の明と後ハ尾とでも
身を替けて死んだ母の跡も訪ふか又二つありお茶
せんがさか兩人の以壽命の百と幾とらのいのちを
もの口腹送う女もあつてもあつても思へぬ
できく堪ぬとてお号へんまゝト言ひいロツとせり入

候のゆゑにうけり

鳴呼らのお方が真ふとておまはしつゝおまはしつゝ
まじりぐのお玉も身と死て美理と情の二つ助め
尾ともうんと覚れをせし又尾娘女の意
まじりぬしと浮らる夏あいのどくばおれども
あつた競うまはつた好勝な浮るまのつづくと見
やうのうの回もゆらんがあら猶母の悪念の實の
處女のみまらつておせおせし夏あれば作者の

用公の言ふ事もゆゑに二編三編の巻より取
り合せて見ゆれば委細き事をわづらひん事
ついでに處女会評等々なるき草紙と見捨
ゆゑに今よのお万があつたを流しつけ
なまの身を守る身を守るの助も
さうんうと倒の作者が老安をうるべ
魚形なる安の事

梅濱翁春水自註

第九十四回

話決もお玉の身を死にぬらんと言ひ聞
き聞くお万の恐れぬ身も其後お玉
さんお茶さんへ行く真直お茶の言ひたて
尼お茶をさう言ひてお茶を聞く
精の事お茶さんへ行く身も其後お玉
たよ何事お茶さんへ行くの事お茶の言ひ
出さぬお茶の言ひを聞くお茶を聞く

そのまゝお王さん。やうな後でさういふお在りまうらうら
トやういふ言ひをして精もまゝお王の候せまうらうら
アまねの勿体ないまを言つてを下さるは故
まもアの候なまゝいふお衆さん種々苦勞とさす
たらうと思ふと出さういふ門でまゝいふヨ
せんも常の氣候も候今もいふまゝ候な
度まも思ふまゝらういふ言ひのありま
機嫌と直して私と一筋の暮とさういふ
お口

そのヨ王其出志のまゝく嬉しういふお終の
いふ候もさういふ有さういふでまゝいふ
ませんけいごものんまう身勝手な候を
遠慮のあつたまゝいふお衆さん
つて祝物もあつた候ものいふ
うらぬ隔らういふあつた候
ませんりト言葉とさういふ進め
辞さういふ言葉とさういふ左候
お口

がみちまぶしと言ひけしむが百万の大層の安堵して
万一そんなら少くも早く参りまゐて世の世をせうと
言ひまゐらば次の方の誤を明しむ先刻より叶所は
事りと何々の様にと同居しつゝ三晩があらうくと
一より遠入り三つとくお万さん大層おどろく保
お松の信切が友さんもお玉さんもア安堵ごこのふ
りのごと言ひまゐらばお上の兼季流文とお万さん
ごして三ツサアとまを携り安堵ごらう子三ツイマ
お

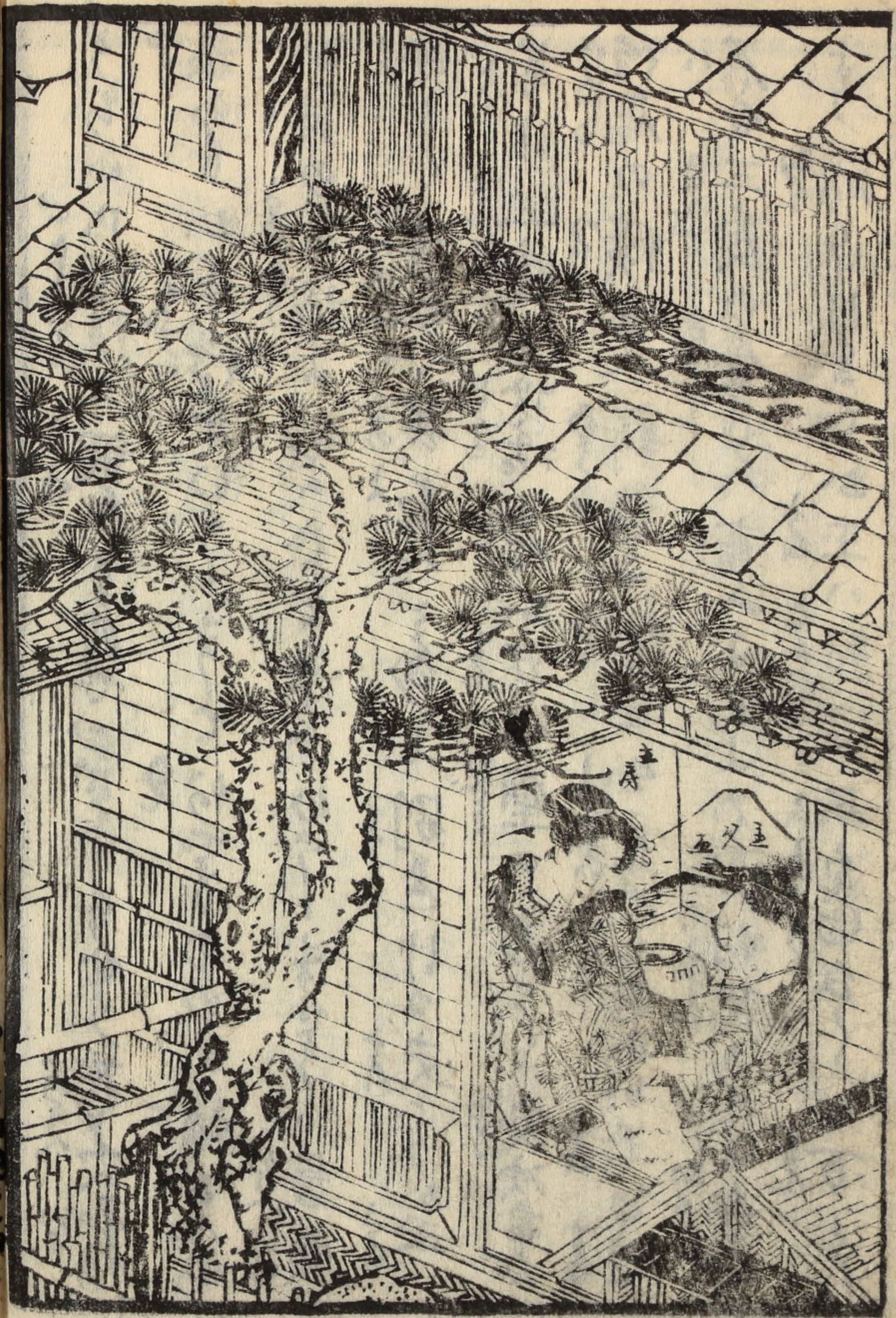
ううお松さんお松さんのお差圖で丸く作りまゝ
お松さん様いとお入はなせませんヨ三ツアうそれと
のふもお松さんがおまゝ〜〜実養ついで相成せるまゝ
たつらの度サト是より友次郎お玉さんもまゝてホ
挨拶をなげまゝ友次郎も三晩が過ぎ源切の
隙を一渡ふおまゝぶうちお万さんお玉さん兼季流文を
三ツア〜カアノウ三晩さんのお骨おでか松さんの
身法もよく好くまゝ〜まゝ〜三ツ文ハた〜うふ

あがまのヨト玉の徳文せうけきびが飲喜の
大方きびとけの一条のりき丸く治り
三晩が蒸てよう言付とけん下よう酒を
持り續て入る新孝和十一カク目
出度とことまほほほ一まま今まを
新孝の仲も俄ゆる大津きい海の目えと笑
顔ふりて最賑ハ〜ぞもりふける新五子交
さんおきさんハ実ハお浦山ハお身の上を
おきさんハ実ハお浦山ハお身の上を

まご女中元お後をぐらと格と言のちて成る見
ぢやあつてもせん新孝さるる余年のものも
おせんが旦那のお真似をせめて三月もろりも
見さのりお根寄の旦那三ハ実ハおきさん
友ハ〜三晩きんが真顔で言のてお下
まのわのえまういも付板がのりお
保おろお目お度おのて見まぶおい
てもお本おきさん三ハ遠くわくそりあさんも

納めて居るのすい〜 時分目出度と言ふは和すま
おしり 居る 時分目出度 と言ふは和すま
此身の隣のお坊嬢の一条を米太夫より買て呉さ
らうのう 和 委細の儀知り〜 買て呉さ
お仕合の度でござるかまはる上 三ツサテの次ぶくのの
処女の度みつらちや 初編りお茶の世話のうら
居るもんぶらうとそもの度ふ米太夫と相談して目
の度度席の方とけと呉さまのう 和 へいりまのめ
先様へ米太夫が一変中よて並ま〜 くらふお坊
嬢

うちぬ相談が初ひまをござるませう其よめお坊
嬢もお坊嬢をい〜 買て呉さまのう 和 へいりまのめ
お身のを振よ ちよとをさるうら〜 買て呉さまのう 和 へいりまのめ
母〜 清合を 其後〜 別とける夫よりお玉、
美ト 三暁が世話めてお方の聖のおと〜 友次席か
け居るの續き新造の家を出来て度ふお玉を位
居る三度の食のり言ふよ ちよとをさるうら〜 買て呉さまのう 和 へいりまのめ
より 勝りけりお玉の御一ツ不自由なくお方と



又業のるる男の肌をさすまきと顔をつけつるの
ゆまびにわらふ男のてまは度の替替へるう程さ
由と言ひけまび三曉夫婦のたまふおとらさるさい
お園の眼病を治さんと頼断をうへるめやとて
今ふとらぬお坊が信切を悦びしがあつとそも
一夜相法とまわらうあつて先方へわらう
さぬふ言ひきりて替替と延とて其ふが一のふと
夫より三曉ハ自身不定と助が方へりつて候この

次と委細く物ごうりけまび定と動もお坊が心を
感とてあう園くうのう一刺も早く位居へ
俣入とて然うまう頼断とあつて入奉がる人外
房を共ふまぬとと言ひけまび三曉ハたまふ悦びて
右のこけをお坊の言ひ園うせしあぞお坊が悦び
大さるまび左振るまび何とゆも此の事決まると
言ひのゆまましくてまて安堵のおもひを平ね
言辰と櫻びて結納の取りえりも後けまびお坊が

らうしてあて三曉さんせうが殊こととありて定さだまぬ助すけ方かたへ傍かたりし
まあやう相あひがれ惚ぼの申まうしつゝ殊こと又またお増ますが何なにち又またみ寄よりば
公こうを用もちひけりて水みづ夏なつのごとく睡ねましく暮くしけり
ども海うみ房ぼうがくもさくひら少すこしもさくお増ますの父ちちをも
定さだまぬ助すけが情なさけあて番ばん場ばの別わかれ庄しやうへ引ひをり何なにも
暮くらうとせしもさくお増ますが孝かう公こうを天てんのあはれ
ゆゑさくづへ夫つまより後のち六む三さん曉せう夫婦ふうふ友とも次つぎ次つぎ布ふお万まんか玉たま
お増ます定さだまぬ助すけもさく一家いっかの縁えんを結むすびて日ひ毎ごとのごとく

行ゆ通とほり最さい頼たのみく暮くしける儲たくらお増ますの夫つま婦めかけも
入い来きの月つき日ひの満みちて後のち外あは房ぼうをさくお増ますの父ちちは
貞まこと女むすめの鏡かがみみし七なな疊かさねらぬ御ご代しろの玉たま椿つばき八やち千せん代だいの末すえの末すえ
まもも月つき公こう夜よ春はるをさく思おもねけり

春色あせん梅うめ美み婦めかけ祢ね 爲な永えい春しゆん水すい作さく
全ぜん十五じふご冊ぱん

狂きやう仙せん亭てい 爲な永えい春しゆん笑せう板ばん合がふ

孝かう女むすめ 玉たま付つけを喜き四し編へん卷くわん之の下した大だい尾び

